

平成二十二年二月一日発行（毎月一回十日発行） 通巻八四一号  
昭和二十五年四月二日第三種郵便物認可

# 火星

平成二十二年二月号



七曜抄 (七)

山尾玉藻

湖の鴨が田にゐる初景色

春著の子長き袂を見せ合へる

踏切の棹が春著の胸に来し

くれなゐに罨の枯るる手毬唄

鷗らに捲きこまれゆくインバネス  
職員室の机に柚子をひとつづつ  
竹馬を作れる日向すぐに失せ  
霜晴の入つてみたき牛井屋  
綿虫と島原の門くぐりけり  
紋付干す朽野見ゆる二階かな

# 太白星

柳生千枝子

老いといふ日月ありぬ女郎花  
御所昏し波紋の如き冬の風  
山伏の冬の息聞く襖の絵  
初眠る夜はせせらぎの音ばかり  
夜の海の昏みに寒き魚群の渦  
口紅を濃くひき冬の雨へ出づ  
晦日そば拭き残したる窓一つ

杉浦典子

綿虫や薪になる木とならぬ木と  
川舟の冬紅葉より返しけり

着ぶくれの右ポケットに入れたはず  
しぐるるやまだたましひのなき地蔵  
银杏散る歌舞伎座中座なき空に  
冬雲に切れ目グリコの大看板  
みづうみに渚ありけり緋燕干す

浜口高子

冬仕度すとんと抜けし櫛の空  
波音に痩せてゐたりし柿簾  
松手入地下足袋の裏降りてくる  
はぎれよき美山の水音冬立てり  
都大路半分濡るる初時雨  
雲版の二三打僧の大マスク  
友禅の流れに膨る雪明り

# 火星作品

## 山尾玉藻選

椿象や神のエスプリ疑はず  
神 戸 深 澤 鱻

屋根裏に煙のほふ冬用意

霧ごめや大連ホテルにて尿る

初しぐれ一盞にして華やげり

切れ切れに雁木切れ切れに綿虫

黄落の空より梯子はづしけり  
大和郡山城 孝子

風の木に目白来てをり日短か

まほろばの鳶の輪ひろき七五三

鴨来るや夫とは違ふあそびせむ

枯を来て銭かぞへみる膝の上

手どりたる鯉に鯉の香初しぐれ  
宝 塚 山 本 耀 子

まだ空いてゐる水の辺の落葉籠

着ぶくれて紙コップ手に廊をり

露巻き込みし甘藍の巻きはじめ  
ばつた這ひゐる薬園の枯深む  
あらかしの幹の手ざはり冬はじめ  
蓮枯れてゐる明るさを歩みけり  
笹鳴に漉き舟の水均しけり  
金星の点りはじめし鼯畏  
片はづしのマスクに沖の座礁船  
冬近し緑青まみれの船ランプ  
どの家も菜園のある神渡し  
息づかひ翅にありけり冬の蝶  
括られし萩の裏より冬の月  
語部が息を抜くとき木の実落つ  
絵襖のぴしやと閉められずれてゐし  
まつさきに犬が舟降る鵙日和  
赤い実に手を濡らしけり神の留守  
雪ばんばかづら橋まで来てをりぬ  
かづら橋のへだたりにある柚のいろ

宝塚蘭定かず子

宝塚山田美恵子

西宮米澤光子

# 選のあとに

山尾 玉藻

屋根裏に煙のほふ冬用意

深澤 鱧

家人が庭で落葉か反古を焚いているのだらうか、作者が「冬用意」のために上つて来た「屋根裏」に煙が匂った。埃つぱく暗い「屋根裏」に漂う「煙」の香に、穏やかな温かさを感じたことだろう。今日ひと日、家族それぞれが、思い思いの場所で、とりどりの「冬用意」をしているのである。

鴨来るや夫とは違ふあそびせむ

城 孝子

俳人は鴨が飛来したと聞くと落ちつかなくなり、すぐにも鴨に会いに行きたくなる。俳人とはよくよく変で厄介。しかも俳句は所詮は夏炉冬扇。そんなことは百も承知の作者だからこそ「あそび」と言つてのける。「夫とは違ふ」の措辞にどこか自嘲的なひびきがあり、この点に大いに共感する。

露巻き込みし甘藍の巻きはじめ

山本 耀子

「稚い「甘藍」の葉が漸く密に重なり始め、その小さな渦の真中に「露」が光っているという、なんとも美しい景である。「露巻き込みし」の写生の効いた巧みな詠みぶりで、稚いながらも「甘藍」にそなわった生命力を瑞々しく表出している。

こころを籠めて「甘藍」を育まれる作者である。その写生眼の確かさは「甘藍」への愛情と表裏する。

片はづしのマスクに沖の座礁船

蘭定かず子

片耳に垂れる「片はづしのマスク」はだらしなく、寒々しい対象である。その人物が眺める「沖の座礁船」もまた冴え冴えとした対象である。二つの対象が相乗して底知れぬ寒さを感じさせる。両耳にかけられたマスクではこれほどの寒さは期待できず、詩の在り処を十分に心得る作者である。

冬近し緑青まみれの船ランプ

山田美恵子

「緑青まみれの船ランプ」とは、潮風にさらされ続けた漁船のランプが緑色に錆ついている様子である。緑青色は船の歴史そのものであり、今後いよいよその色を濃くして行くことだろう。そのような作者の感慨を「冬近し」が語っている。

紅い実に手を濡らしけり神の留守

米澤 光子

余りの美しさに「紅い実」に思わず触れた手が、その露でたっぷり濡れたのだ。その思いがけなさに作者のこころは動き、そのところが自ずと「神の留守」を意識させた。偶然が偶然を呼び、必然的にひとつの世界を創りあげた。

# 恒星圈

高松由利子

段取りの母あるやうに冬支度  
回転ドア押す著ぶくれの旅靴  
北窓のながめよき方鮫鱈鍋  
初時雨宵のまつりの狐面  
小春日の系図に白洲次郎の名

大東由美子

田中みのる

ややありて冬の花火の碧き音  
本棚を背に着膨れぬたりけり  
ぶ厚きに葉はさめば冬の鴝  
時雨忌の鷗と晴るる雄島かな  
吠ゆる犬吠えかへす犬神無月

坤櫓うしろに菊花展  
菊花展孔雀の雌雄研ぎ競ふ  
お抹茶の席もありけり菊花展  
若武者の太鼓に離す菊花展  
蛸の目の見はる明石の菊花展

高尾豊子

戸栗末廣

表彰のおふれの届く石路の花  
初霜やプリンスホテルへ直行す  
朝日燦々柚子のしづくの柚子いろに  
時雨るるや三昧にある大きな木  
霜晴の鼓動の音の歩幅かな

前山の鳥が木を打つ文化の日  
着ぶくれて檀家らしきがまた来る  
かいつぶり浮かぬ貌して浮きにけり  
短日の一駅ごとに人こぼし  
冬桜息吹きかけてパスタ食ぶ

# 獅子座

山尾玉藻推薦

涼野海音

わが後ろ誰か通りし日向ぼこ  
菊花展行き止りまで来りけり  
夕顔や狐の面を外したる  
踏切の音の聞こゆる湯冷めかな

藤田素子

小春かな水着一枚干しに出で  
凧や高階より降る犬の声  
今さらに知ること多しむかご飯  
露けしやキツチンに鳴る電子音

上川いつ子

手ばさみの鈴鳴る母の冬支度  
末枯や峰越えとなる魚屋道  
昼網のにぎはひに居て神の留守  
門川の高鳴る日なり冬支度

緒方佳子

安産の寺のオリーブ実沢山  
江ノ電の小さな窓や十二月  
河馬の子は乳足りてゐて木の実降る  
他のこと考へてゐる槇櫨の実

松井倫子

初顔を合はせ小春のバスツアー  
今朝冬の空に一点尾白鷺  
力抜けよと棒立ち颯ふり向きぬ  
杭の如き河馬の歯冬日嚙みにけり

田中文治

今日からと牡蠣のメニューを渡されし  
鬼胡桃遅刻出勤うす笑ひ  
熱爛やいつもの客は見当らず  
鳥に見られてピラカンサ色づきぬ

川端俊雄

神木をひと回りせし神の留守  
猪鍋の煮詰つて来し山の風  
深吉野の闇おつ被り葉喰  
くさめして酔ひ醒めにけり寒昂